

乳幼児のコロナワクチン、副反応不安？青森県内で接種進まず

12/4(日) 東奥日報

11月から青森県内の多くの自治体で始まった乳幼児（生後6カ月～4歳）向け新型コロナウイルスワクチンの接種が進んでいない。県内の小児科医によると、予約は予想よりも少ないという。八戸市では1回目の接種を終えたのは対象者の2%。背景として、副反応への保護者の不安感などが指摘されている。関係者は、ワクチンのメリット・デメリットを考慮し、接種を判断してもらいたいとしている。

11月29日、弘前市の「あらいこどもクリニック」で、乳幼児接種が行われていた。1歳半の女兒に接種を受けさせた同市の男性会社員（30）は「何度も保育園が休園になり、自分の子もいつ感染するか心配だった。副反応のことも考えたが、感染時のリスクを考えると、受けさせた方がいいと思った」と話した。

この日、同クリニックで接種を受けた乳幼児は10人。荒井宏治院長は「インフルエンザに比べると接種者はまだまだ少ない」と語った。

全国的に新型コロナの乳幼児接種は進んでおらず、国の資料によると、1回以上接種した人の割合は0.9%（12月2日現在）。接種者が伸びない理由として▽副反応への不安感がある▽子どもは重症化しにくいいためワクチンは不要と考える人が多いなどが挙げられている。

荒井院長によると、まれではあるが、健康な子どもでも重症化すると数日以内に亡くなることもあるという。心筋炎や不整脈など循環器系の疾患や、高熱によるけいれんから急性脳症に進展するケースが多いとされている。荒井院長は「感染した場合のリスクを考慮し接種を検討してもらいたい」と述べた。

八戸市の新型コロナワクチン対策室によると、同市の乳幼児ワクチン対象者約6300人のうち1回目接種を終了したのは2%（11月末現在）で、担当者は「接種が進んでいるとは言えない」とし、「乳幼児は他の定期接種もありスケジュール調整が難しいのではないかと説明した。

日本小児科学会は「メリット（発症予防）がデメリット（副反応等）を上回る」として、乳幼児ワクチン接種を推奨しているが、藤崎町の「せきばクリニック」の関場慶博院長は「mRNAワクチンの長期的な副反応のデータがまだない中で、長期的副反応のリスクを保護者に十二分に説明しきれない部分もある。学会の考え方を説明し、保護者に決めてもらうようにしている」と語った。青森市の「すとう小児科クリニック」の須藤善雅院長は「乳幼児のワクチン接種後の局所反応や発熱は、成人に比べると少ないことを知ってもらいたい」とし、「乳幼児に感染が広がっている現状を踏まえ接種を検討してほしい」と話した。

県の取りまとめ（11月15日時点）では、11月中に乳幼児接種を始めたのは青森、弘前、八戸など32市町村。むつ市や藤崎町、七戸町など7市町村は12月から実施。風間浦村は1月から実施する予定。

乳幼児向けの新型コロナウイルスワクチン 乳幼児ワクチンはファイザー製で、初期に流行した従来株に対応した成分を含む。国は、現在主流のオミクロン株にも効果が期待できるとしている。3回接種が必要で、1回目と2回目は3週間、2回目と3回目は8週間空ける。県によると、青森県の0～4歳の人口は1月1日時点で3万6305人。